

## 立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

## 大学院学生研究

## 2022年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	教育学 専攻
研究代表者 (2023年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年	<input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 3年	石渡 美穂子
指導教員	所属部局・職名		氏名
	文学部・教授		石黒広昭
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	精神障害者の実践共同体と成員のアイデンティティの共創過程の解明		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2023年3月現 在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	文学研究科・教育学専攻・博士課程 後期・3年		石渡 美穂子
研究期間	2022 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 196,911円 / (採択金額) 200,000円		

## 研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、精神障害のある人々を中心とする実践共同体と、成員のアイデンティティの共発達(Cole, 1998)過程を明らかにする実践研究である。本研究では、精神障害をめぐる支配的言説(例えば健常主義や優生思想)が、ミクロな相互行為の中でどのように可視化され、実践参加者のアイデンティティおよび実践がどのように変容していくのかを明らかにする。その際、実践共同体内部における、ミクロな相互行為に埋め込まれた権力性を明らかにする方法論によって、精神障害に関わるカテゴリーの意味交渉過程に孕む抑圧あるいは解放のメカニズムを明らかにすることを通して、地域で精神障害のある人々と共にコミュニティをデザインすることの意義について検討する。

## キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 精神障害 } { アイデンティティ発達 } { 学習と権力 }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、精神障害に関わる言説（例えば健常主義）を所与のものとして捉えるのではなく、特定の社会的実践に参加する人々による意味交渉によって物質化する言説（Gee, 2011）として捉える。精神障害をめぐるマクロな言説は、それ自体として直接的に当事者を抑圧する媒体となるわけではない。それらは、当事者が存在する環境において人々によって使用される（言語化したり、モニュメント化する）ことで物質化し、それらが媒介手段（Vygotsky, 1930）として使用されることで、人々の行為及び環境を変容させると同時に、マクロな言説そのものも、ミクロな相互行為において変容するものとして捉える。この「環境－媒介手段－人間」という三項関係のダイナミックな変容に関する研究は、これまで社会文化的アプローチ（Sociocultural Approaches）における人間の学習と発達に関する研究において様々に理論化・応用化されてきた（Lave and Wenger, 1991; Wertsch, 1994; Engestrom, 1987, Cole, 2002）。しかし 2010 年代以降、実際の社会におけるマイノリティの再生産から逃れることができていないという反省から、これらの理論にポスト構造主義や批判教育学等の批判理論の受容を通して理論化・実践化を試みる「批判的社会文化理論 critical sociocultural theories (Esmonde and Booker, 2017)」が北米の学習科学の領域で台頭しつつある。本研究では、障害研究、特に精神障害の領域において、これらの視点を取り入れながら、マクロな言説がいかにミクロな相互行為で物質化し、「精神障害者」を再生産するのか、あるいは言説自体もまた変容し、異なる実践形態およびアイデンティティを生み出すのかについて、学習 learning と権力 power という 2 つの概念を理論的射程に含めた分析を行う。

今年度は主に、

- ① 欧米を中心に発展してきた批判的障害学による障害研究における問いに対し、批判的社会文化理論がいかに応えることができるかについての理論的整理
- ② 調査対象者らの活動場面に対する談話分析のための手法の整理
- ③ 調査対象団体に対する調査を行った。以下が今年度の成果である。

**①理論的整理：「障害」を「関係」概念で捉える際の、「関係」概念の位相の問題**

1990 年代以降、欧米の障害学において障害概念の捉え直しが図られ、「インペアメント（器質的疾患）/ ディスアビリティ（社会的障壁）」や「個人モデル / 社会モデル」といった二分法によって、障害の起こる要因を個人から社会の問題へと移行させた。日本の障害者福祉政策においても、この社会モデルをもとにした政策へと移行してきた。しかし 2000 年代以降、これらのモデルが包含する「インペアメント/ ディスアビリティ」という二分法それ自体を批判し、この二分法を解体すべく台頭したのが批判的障害学である。これまでの障害研究における、様々な方法論に内在する健常主義や個人主義を明らかにし、自らの諸理論を自己批判する形で、既存の障害概念の再生産から逃れ続ける方法論の模索がなされている（辰己, 2021; 2022）。これまでの障害研究におけるこれらの議論は、「人間」「環境」「社会」といった諸概念がいかに人間中心主義的（かつ健常主義的）な観念を前提にしているかを暴く上で重要なものであるが、辰己（2022）はこれらの概念の定義に注力するというよりも、概念の変遷をメタ理論的に検討することを通して、概念がいかに歴史や文化と結びついているのか、また、全ての障害の経験を「社会」という概念にのみ還元するのではなく、「女性」や「高齢者」といった障害概念とは異なる諸概念との「関係」同士が交差する場において起こる「障害」の様相を捉えようとする。このような諸概念との「関係」を基軸にした議論は、個人の複雑な経験から障害の経験が生成される契機を捉えようとするものである。

批判的障害学における理論研究は、マクロな言説がいかにテキストに内在し、一定の人々を抑圧してきたかを暴いてきたが、諸概念との「関係」から障害の経験を捉える場合、人々がいかにそれら諸概念間の関係において独自に意味生成し、彼らの生きる環境を方向づけているのか、より複雑な様相を捉える必要がある。実践に生きる当事者にとって、それらは抑圧の道具となる場合もあるが、当事者のウェルビーイングに寄与することもあるだろう。これまでの障害研究は、①当事者の意味生成的側面、②諸概念がいつ、誰を「障害者」に置くのか、③人々の相互行為にいかに権力が埋め込まれ、意味生成に影響を与えているのか、を捉える分析視座を持ち合わせてこなかった。諸概念は、言語を含む物質的なアーティファクトと結びついて初めて物質化し、人々の行為と環境を改変する媒介手段となる。諸概念を静的で安定したものとして見なした上での「関係」論の位相ではなく、諸概念とアーティファクトとの関係

**研究成果の概要 (つづき)**

(媒介手段)、それらの人々との関係がいかなるものか、そしてその複雑な意味生成の攻防においていかに人々の行為が制約されたり拡張されたりするかという、概念発達 (Vygotsky, 1934) の位相による経験的研究が求められると考える。(この成果は、下記の「研究発表」③の1に該当する)

**②調査対象者らの活動場面に対する談話分析のための手法の整理**

本年度は上記の問題に対してどのような分析手法が有効かを検討した。上記の問題について議論されているのが北米の学習科学の領域である。この領域では、アメリカの様々なマイノリティを再生産するマクロな権力性を暴く批判理論と、メゾ・ミクロレベルの相互行為を微視的に分析する社会文化理論を接続することによって、マイノリティの再生産を解体する学習環境のデザインの方法論が模索されている。

エスニシティやジェンダー、障害など、マイノリティに関わるカテゴリーがいかにメゾ・ミクロレベルで維持・再生産されるかについての実践研究は、先に述べた批判的社会文化理論においても検討されている (Esmonde and Booker, 2017)。しかし筆者は、ミクロな相互行為にこそ、障害当事者のアイデンティティが攪乱されるような契機が潜んでいると考える。権力はマクロな言説それ自体に内在するのではなく、実践において新たなカテゴリーが産出されたり、既存のカテゴリーに対し新たな意味が生成されたりする際の、それらを制約する相互行為の中に埋め込まれている。本研究では、「言語を媒介手段として個人と実践とが変容していくプロセス (Cole, 1998)」というカテゴリーの再生産的側面に焦点を当ててきたこれまでの社会文化理論に対し、「どのような相互行為がアイデンティティの攪乱をもたらすのだろうか」という、行為者たちによる、意味の生成的側面により焦点を当てる。これらを踏まえて、本研究では当事者のアイデンティティ変容を、実践に参加する参加者の学習と発達の問題として捉え、障害に関わるカテゴリーの意味の攻防を明らかにする談話分析を行う (Wortham, 2006; 2015)。その後、どのような相互行為のパターンがアイデンティティの即興性を保証するのかを明らかにするため、発話の多声的な側面により焦点を当てる Cheyne and Tarulli(1999)の分析視点を採用する。これらはシステマティックな分析手法ではないため、次年度は上記の談話分析といかに接続できるかを検討し、具体的な分析に入っていく。(この成果は、下記の「研究発表」③の2に該当する)

**③調査対象団体に対する調査**

本年度、調査対象団体である「社会福祉法人・浦河べてるの家」での調査・データ収集を開始した。

- (1) 団体スタッフとの打ち合わせを通して研究の方向性を共有・各活動場面のエスノグラフィによるフィールドノーツ作成 (浦河べてるの家・2022年9月12~15日)
- (2) 各活動場面のエスノグラフィによるフィールドノーツ作成・スタッフへのインタビュー (浦河べてるの家・2022年12月12~14日)
- (3) 当事者研究ワークショップへの参加 (横浜市鶴見区・2023年1月22日)
- (4) 2010年~2012年にかけてのミーティング (当事者研究) 場面の映像 (週1回1時間×3年分) をお借りできることとなった。映像を確認後分析として使用できるようであれば、談話分析のデータとして使用する。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

**① 雑誌論文への投稿**

該当なし

**② 図書**

該当なし

**③ シンポジウム・公開講演会等の開催**

**【シンポジウム】**

1. 楠見友輔・辰己一輝・石渡美穂子・石黒広昭「障害概念の再生産からの逃避」質的心理学会・第19回大会、2022年10月29～30日、愛知大学(話題提供)
2. 土倉英志・川床靖子・青山征彦・宋雪梅・石渡美穂子「主体性をとらえなおす—社会文化的視点から—」質的心理学会、第19回大会、2022年10月29～30日、愛知大学(話題提供)

**④ その他**

該当なし